

## 主イエスの心に動かされて ～山室軍平と救世軍

立石真崇

奨励者紹介[たていし・まさたか]

救世軍神戸小隊・泉尾小隊牧師

さて、使徒たちはイエスのところに集まって来て、自分たちが行ったことや教えたことを残らず報告した。イエスは、「さあ、あなたがただけで人里離れた所へ行って、しばらく休むがよい」と言われた。出入りする人が多くて、食事をする暇もなかったからである。そこで、一同は舟に乗って、自分たちだけで人里離れた所へ行った。ところが、多くの人々は彼らが出かけて行くのを見て、それと気づき、すべての町からそこへ一斉に駆けつけ、彼らより先に着いた。イエスは舟から上がり、大勢の群衆を見て、飼い主のいない羊のような有様を深く憐れみ、いろいろと教え始められた。そのうち、時もだいたいぶたつたので、弟子たちがイエスのそばに来て言った。「ここは人里離れた所で、時間もだいたいぶたちました。人々を解散させてください。そうすれば、自分で周りの里や村へ、何か食べる物を買に行きましょう。」これに対してイエスは、「あなたがたが彼らに食べ物を与えなさい」とお答えになった。弟子たちは、「わたしたちが二百デナリオンものパンを買って来て、みんなに食べさせるのですか」と言った。イエスは言われた。「パンは幾つあるのか。見て来なさい。」弟子たちは確かめて来て、言った。「五つあります。それに魚が二匹です。」そこで、イエスは弟子たちに、皆を組に分けて、青草の上に座らせるようにお命じになった。人々は、百人、五十人ずつまとまって腰を下ろした。イエスは五つのパンと二匹の魚を取り、天を仰いで賛美の祈りを唱え、パンを裂いて、弟子たちに渡しては配らせ、二匹の魚も皆に分配された。すべての人が食べて満腹した。そして、パンの屑と魚の残りを集めると、十二の籠にいっぱいになった。パンを食べた人は男が五千人であった。

(マルコによる福音書 6章 30—44 節)

### イエス・キリストの憐れみから生まれ、広がる神の国

今日、この祈りの場集われたお一人お一人に、神様の祝福が豊かにありますようにお祈りいたします。

聖書からマルコによる福音書の言葉に耳を傾けました。五つのパンと二匹の魚によって、イエス・キリストが五千人以上もの人を満たされたと、マルコは伝えます。非常に不思議に思われる出来事ですので、これをどう解釈し、受け止めるかについてはいろいろな立場や見方があるだろうと思います。しかし、今日注目したいことは、この出来事がイエス・キリストの深い憐れみから生まれているということです。

イエス・キリストは、「大勢の群衆」が「飼い主のいない羊のような有様」であることに目を留められました。そして、「深く憐れみ、いろいろと教え始められました(34 節)。誰を信頼し、何を頼りにすればよいのかを見い出せずにいる人々を深く憐れまれ、彼らをそのままにはなさらずに語りかけられたのです。羊を守り導く牧者のように神様があなたがたと共におられる。あなたは神様に覚えられている。神様のもとにあなたのための場所がある、と。イエス・キリストの「教え」とは、マルコによる福音書の文脈をふまえれ

ば、「神の福音」でもあります。「神の国」があなたのためにあるという良い知らせです(1章 14～15節)。このようなイエス・キリストの深い憐れみと神の国を告げる言葉の延長線上に、わずかな食物が豊かにされ、多くの人々に届き、一人一人を満たす出来事が生まれました。これはただ不思議をうたう出来事ではなく、イエス・キリストの憐れみの心を映し出す出来事であり、イエス・キリストを通して神の国が新しく現れ出た出来事なのです。

そこでもう一つ心に留まることは、イエス・キリストの深い憐れみが、弟子たちと群衆とを新しく出会わせ、結び合わせたということです。人が人と共に生きる新しい道が開かれたということです。

弟子たちも彼らなりに群衆を思いやりました。「二百デナリオンものパンを買って来て、みんなに食べさせるのですか」という言葉は、彼らなりに費用や時間や場所を検討したことがうかがえます(37節)。しかし、手に余る状況であり、自分たちで解決してもらうほかないという結論に至りました。「人々を解散させてください。そうすれば、自分で(中略)買いに行くでしょう」という言葉には、もうこれ以上関わることはできないという思いが表れています(36節)。

しかし、イエス・キリストは、「あなたがたが彼らに食べ物を与えなさい」と、弟子たちと群衆をなおも結び合わせようとなさいます(37節)。そして、弟子たちが用意できる食べ物を確かめさせ、見つかった「五つのパンと二匹の魚を取り、天を仰いで賛美の祈りを唱え」られました(37節)。弟子たちが用意できた食べ物がたとえわずかなものであったとしても無になさらずに、それらを祝福されました。そして、弟子たちの手を通して、神の祝福として食べ物を人々に分け与えられました。「飼い主のいない羊」のようだと表現されていた群衆は導かれて組に分かれ、百人、五十人ずつまとまり、食べ物を分かち合いました。イエス・キリストの憐れみと祝福によって、弟子たちの、また、人々の心、思いやり、持ち物、力、時間、そういったものが引き出され、組み合わせられて、すべての人が満たされました(42節)。それは神の国の豊かさを表す姿であると言えます。

このような出来事が、今も、イエス・キリストとの出会いにおいて生まれます。そしてまた、イエス・キリストを信じる者たちの集まりである教会において生まれます。私という存在が受け入れられ、祝福される。自分の思いを超える仕方で、神様が自分を生かして用いてくださる。そして、人と共に生きる道が開かれるという出来事が生まれます。しかも、その人自身が自信を持っているものよりも、むしろ数に足りないのではないかと思うものを、神様は祝福して下さり、お互いが共に生きるために豊かに用いてくださいます。

### 救世軍 The Salvation Army

そのようなイエス・キリストの憐れみと祝福のうちに、私が所属している教派、「救世軍」(The Salvation Army)の歩みも含まれていると紹介することができます。救世軍は1865年、イギリスにおいて、ウィリアム・ブースという伝道者によって始まりました。当時、イギリスのロンドンの中には貧しく、苦しい生活を強いられている人々が多く暮らしている地域がありました。ブースはそのような人々に向かってイエス・キリストを宣べ伝え、実際的な支援の手をさしのべました。

救世軍のある古い書物では、ブースのうちに生まれた憐れみの心が救世軍の始まりにつながったと、次のように述べています。

初め大将[筆者注、ウィリアム・ブース]はロンドン東部の貧民窟において集会を営みたりしが、このあ

たりに何れの宗教団体にも見過ごしにせられたる群衆ありて、その大部分はかつて教会または会堂に出席したることなく、安息日にも、平日のごとく職業に従事するか、しからざれば遊惰、飽食、醉酒、犯罪のためにこれを用い、悪魔は時を得顔に彼らの間に跳梁するありさまを見て、深くこれを憐れみたり。大将がかく棄てられて滅びに赴く群衆を見るや、その心に起こりたる疑問はこれなり。いわく救いはこの人々にも及ぼすことを得べきかと。しかして大将はかならずその方法の存すべきことを信じ、真理を喪われたる同胞に伝えて、神に立帰らしめんために、身を献ぐることを決心するに至りなり。

(参考図書2 145—146頁、傍線筆者)

そして、ブースが活動を進めるために取り入れた方法のひとつが、軍隊の組織を模倣するというのでした。もちろん、軍隊の組織を模倣するといっても、味方と敵をつくり、対立する相手を倒すという意味ではありません。国や人種や立場にかかわらず、どの人も等しくイエス・キリストのもとに集まり、力を合わせるができるように、そして、イエス・キリストの御名において、どの人にも分け隔てなく関わっていけるようにという願いから、軍隊の組織や制服などを取り入れて活動を進められてきました。そして約160年が経った今では、世界の133の国において救世軍の働きが続いています。

### 日本における救世軍と山室軍平

日本における救世軍の働きにおいて大きな役割を果たした人が、同志社とも関わりのある、山室軍平(1872～1940年)です。

山室は1872年(明治5年)、現在の岡山県新見市にあたる山村で生まれました。学問で身を立てたいと14歳で上京、印刷工場の職工をして新しい生活を始めました。ある時、基督教の路傍伝道に接し、イエス・キリストを信じて生きることに人生の意味と自分の将来があると確信し、16歳の時に洗礼を受けました。ところが、職場の同僚を教会に誘っても肩が凝ると断られ、基督教の印刷物を渡そうとしても読んでもらえないという経験をしました。そこで彼は、「此等の職工、労働者、其の他一般平民の救の為に働かせ給へ。即ちどんな無学な人でも、聞いて解るように福音を傳へ、又どんな無智な人でも、読んで解るやうに真理を書きしるす者とならせ給へ」と祈り、「神と平民の為に<sup>つく</sup>盡す者」となることを人生の新しい目標としました。

(参考図書1 46、47頁)

そのような目標を持った山室は、新島襄と同志社の存在を知り、新島襄を慕って同志社の門をくぐりまです。山室の新生活に対する期待は、「新島襄先生てふ極めて慕ふべき人物と同志社てふ極めて愛すべき校舎」、「同志社は日本国中精神的教育を施す最良の校舎なるを信ずる」という表現で残されています(「吉村隆造宛て書簡」山室武甫編『山室軍平選集』第10巻(書翰集)1955年6、7頁)。実際には苦学のきびしさや信仰と学問との狭間の悩みによって、約5年で学生生活を終えることになりましたが、それでも、山室にとって同志社の経験はかけがえのないものであったことにはちがひありません。

その一例として、山室が在学中に起きた震災(濃尾地震 1891年)があります。山室は石井十次(キリスト者であり社会事業家・岡山孤児院の創設者)を手伝い、身寄りの無い子供たちの保護や募金の支援をお願いする、今でいえば災害救援ボランティアに相当するような働きをしています(山室『青年時

代』117～127頁)。そのような実践の経験は、後の救世軍における伝道や奉仕活動の土壌となっていると思います。

22歳で同志社を去った後にも、「神と平民の為に<sup>つく</sup>盡す者」となるための山室の模索は続きました。いくつかの教会において伝道し、また、仕事に就きながら伝道することも模索しました。そのような彼に、石井十次が救世軍を訪ねるように勧めました。救世軍はちょうど1895年(明治28年)にイギリスから一団を派遣し、正式に日本の救世軍の働きを始めたところでした。山室は救世軍の書物を読み、イエス・キリストを信じる生活がきわめて実践的に述べられていることに感銘を受け、救世軍に加わりました(山室『青年時代』149～151頁)。

山室は23歳で救世軍に加わり、日本人で最初の救世軍の伝道者(士官)になりました。それから68歳で生涯を閉じるまで、「神と平民の為に<sup>つく</sup>盡す」歩みを続けました。当時の一般の人々にイエス・キリストを伝えたいと、『平民の福音』と題する書物を著したり、あるいは、身売りをした女性を保護する廃娼運動、今日の女性保護の働きを進めるなど、伝道と奉仕(社会事業)を車の両輪のようにして展開をしていきました。

彼は後年、自分の歩みをふりかえりながら、救世軍にどのような特色があるのかを述べています。

救世軍の宗教は「失せたる者を尋ねて救ふ」救霊の宗教である。「貧しき者は福音を聞かせらるる」民衆の宗教である。「道や<sup>まがき</sup>籬の<sup>へん</sup>邊に往き、人々を強ひて連れ来る」進撃の宗教である。「飢ゑし時に食はせ、渴きし時に飲ませ、旅人なりし時に宿らせ、裸なりし時に衣せ、病みし時に訪ひ、<sup>ひとや</sup>獄に在りし時に<sup>つか</sup>事ふる」実行の宗教である。又「ユダヤ人もギリシヤ人もなく、奴隷も自主もなく、男も女もなく、基督耶穌にありて一體たる」萬民同胞主義の宗教である。

(山室『青年時代』161頁)

また、別な文章では、ひと握りの人たちによって活動を進めるのではなく、多くの人が力を合わせるのが自分たちのやり方だとも述べています。

「救世軍の一大特色は、其の軍人が総懸りにて奮闘する所にある。…多数民衆の努力によりて、多数民衆を救ふ所にある。他の基督教会では、概ね一ヶ所に一人のえらい先生が居られて、何から何迄其の先生によつて為さるゝ。しかし乍ら救世軍は平凡なる民衆総懸りにて、廣く民衆をキリストに獲ん為に…一人で何十人前の働をするを責はず…忠良なる多数の下士官、兵士が心を合せ、力を協せて、共に世の救の為に戦ふことを、何よりも大事として心がけるのである」。

(山室軍平『一人が一人を 一名、日本の救と救世軍人の責任』救世軍出版及び供給部 1927年第4版 8、9頁)

イギリスで起こった救世軍、また、日本に展開した救世軍、それぞれの歩みにおいて共通して見出されるのは、イエス・キリストの深い憐れみに触れ、そしてまた、祈りと力を合わせる人々の姿です。そして、イエ

ス・キリストを頭として、一人一人が結び合わされる歩みを教えられながら、今にまで至ることができたと言うことができます。

### おすび

そして、この学び舎もイエス・キリストの深い憐れみに結び合いながらその歴史を形づくられていると思います。今日も、お一人お一人にとってここはイエス・キリストと出会う場所ですし、また、イエス・キリストとの出会いによって、新しい自分自身を生きる場所、新しく人と出会う場所、また、新しく世界に向かう場所です。そしてまた、いろいろな人と思いと力を合わせていく機会と可能性に満ちた場所でもあると思います。イエス・キリストの憐れみと祝福のうちに、この日の歩みが形づくられるようにお祈りいたします。

### 〔参考図書〕

山室軍平『私の青年時代：一名、従軍するまで』（救世軍出版及供給部 1929年）

国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/1216690> 最終閲覧日2023年5月16日

ウキリアム・ブース『救世軍の軍令及軍律 兵士の巻』（救世軍日本本堂 1902年）

国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/824186> 最終閲覧日2023年5月16日

同志社大学人文科学研究所編『山室軍平の研究』（同朋舎 1991年）

室田保夫『山室軍平—無名ノ英雄、無名ノ豪傑タルヲ勉メン哉—』（ミネルヴァ書房 2020年）

2023年5月31日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録